

本書の初版にあたる『糖尿病治療事典』が世に出て8年が経過し、この度、その第2版が編集者の繁田幸男, 景山茂, 石井均の3人の先生方大変な御尽力と、実に160名にのぼる先生方の協力により出版された。ページを開いてゆくと、わかりやすい図、表が適切に組み込まれ、テーマごとに少ないページ数の中にも簡潔に要領よくまとめられていることがわかる。目次やキーワードを眺めると、糖尿病の診療において欠かせない項目のほとんどすべてが網羅されているといっても過言ではないと思われる。本書は糖尿病診療の場において百科事典的に活用できるのが最大の利点であろう。

以下、項目のいくつかをピックアップして述べてみたい。疫学と予防では糖尿病の有病率、発生率、そして、それらの国際比較と日本人の糖尿病の特徴が述べられ、その背景にある遺伝因子と環境要因を取り上げ解説されている。糖尿病の一次予防については主要な介入試験について記載され、これらの成果などを参考に作成された健康日本21の要約が載せられている。診断の項では日本糖尿病学会の診断基準を2ページに簡潔に、しかも正確にまとめている。まず、読者にとってこの項は必読のところであろう。

治療の項では食事、運動、経口薬、インスリンの各療法、コントロールの指標と基準や低血糖など多くの項目にわたり、実に99名のエキスパートが著者に名を連ね、細部にわたり丁寧に解説している。治療の項は診療室において実地に最も活用されるものと確信する。

糖尿病治療の目標は、合併症の発症予防と進展抑制にある。本書の24の主項目のうち、合併症に関しては最大のページ数、約130ページを費やして詳細に述べられている。編集代表の繁田先生は、多彩な糖尿病の合併症の病態解明に関して永年にわたり精力を傾けてこられた。まず先生は総論において、今日、治療法の進歩にもかかわらず血管合併症は年々増加の一途を辿っていること、この現状をわれ

われは深刻に受け止めなければならないと警鐘を鳴らされているが、そのとおりである。われわれ臨床家はこれを肝に銘じなければならない。さらに、先生は糖尿病の細小血管症と大血管症の違いを明解に記述しておられる。すなわち、細小血管症においては、諸悪の根源は高血糖であるのに対して、大血管症では糖代謝異常に加えて血圧、脂質代謝、喫煙など、他の多くの要因も大きな役割を演じていること、食生活の欧米化が進んでいるわが国においては大血管症、特に虚血性心疾患はますます増加する危険性が大であると述べ、対策の必要性を強調されている。

合併症のうち、網膜症に関しては眼科からその道のエキスパートの先生方が多数著者に加わっておられることも本書の特徴である。目の合併症の広範な領域で細部にわたり解説されている。糖尿病性腎症に関しては病期分類から血液透析、食事療法など21項目について細かく記されている。神経障害についても概念、診断、検査法から治療まで、20項目に関して簡潔にして要を得た解説が加えられている。

急性合併症としてはケトアシドーシス、高浸透圧性非ケトン性昏睡、乳酸アシドーシスが取り上げられ、病態生理、診断、治療を中心に図表も加えられ、実地にただちに活用できると思う。その他にも近未来の治療の研究や基礎研究領域の要約も加えられ、さらに、糖尿病を取り巻く資料も巻末にあり、本書の価値を高めている。

このように、本書は診療室でも書斎でも気楽にページが開け、糖尿病に関する知識を拡大し深めるのに役立つし、治療の実践面にもただちに活用できる本である。特に第2版では必要な項目のページを容易に開けるよう工夫が加えられており、実に使いやすくなっている。多くの医療従事者の座右の書として活用されるものと確信する。

(A5判 584頁 定価5,880円(本体5,600円+税5%))
2004年 医学書院 刊